人間はクズ　いや、俺は人間のクズ。

lx氷龍xl

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人間はクズ　いや、俺は人間のクズ。

【Ｎコード】
Ｎ２３０１Ｙ

【作者名】
１ｘ氷龍ｘｌ

【あらすじ】
学校１のイケメンが主人公。残念なことにそいつはオタクだった。そんなイケメンが恋をしちゃいました！てへぺろ♪いろんな壁を乗り越え末永く暮らしていけるのだろうか？！

俺は、高校生。

俺は、高校生。
嘘だと思うか？本当だ。
そこ疑ってくるのか貴様、これだから人間は…。
おっと済まない。

俺は、高校生。
帰宅部オールスターズの一員だ。
俺が幼稚園児の頃に立てた将来の夢。
「仮面ライダー」
んで、今更だが自己紹介。
馬鹿か。アホか俺は。
2次元と3次元ごっちゃにしてんじゃねえよっていう。
中村　浩太と申します、はい。
え、読めないの？　本気で言ってんの？
笑えるわぁー　なかむら　こうた　って言います。　クスッ
まぁ、今となっちゃ将来の夢なんて、ちっぽけなもんだよ
俺はこのまま、普通に卒業して、普通に大学入って、普通に就職して、普通に稼いで、普通に結婚して、普通な生活を暮らしていきたい。
学校では割と静かな方。
まぁ、べつにそこまで人に好かれてるわけでもなく嫌われてるわけでも無い。
でも、残念なことに俺は人が嫌いだ。
みんな、高いとこ行ったことあるか？
うんちゃらタワーとか、ゴニョゴニョツリーとか。
そっから見てみろ、蟻がうようよしてんぞ、蟻が。
その蟻が人間。そしてその人間に一人に俺がいる。

とても悲しく思えてくるぜ
みんな、グラセフュとかやる？（著作権的関係で若干変えてます☆）
俺さ、最初にも言ったけど、帰宅部オールスターズの一員なんだ。
オールスターズの中でもナンバーワンを争うゲーマーなんだ。
グラセフュで何回人を殺したと思っております？
ったく、人間って脆いな。うん。

こんな僕にも、好きな人がいます。
いや人間は嫌いだよ？
でもさ、カワイイ人は別だよ／／
性格地味です。
まぁ、帰宅部オールスターズとか言われちゃってますからね。
でも、意外とイケ様って言われるんです。
もったいないって言われます。はい。
なんで、若干髪とか気にしてます、ワックスバリバリです。
あとけっこう見た目はモテる要素たっぷり詰めてます。
でも、地味なんです。
で、ここまでしゃべってきて、なにが言いたかったかというと、
「内面地味チャンのイケ様が狙う！　アイツの彼氏は俺だけだ！」
っていうね。
でもね、俺ね、女子との関わり方と変わらんのよ。
帰宅部オールスターズに聞いても、
「とりあえず触っちまえよ　ぐへへへへ」
「ただただ見つめるんだ。相手の目を…じっと…そして……逃げろ」
「俺が駆けつけるから呼んでくれよ」
パッと見変態内面変態しかいねえからこんな感じの答えしか帰って
きやしねえ。

そんな俺がアイツのハートをキャッチして、無事結婚♪てきなね。
そんなＨａｐｐｙ　Ｅｎｄで終わればいいなと思いまっする。

さてと、登校しますか。もうソロ８時１５分。

うん、やばい♪

俺は、高校生。（後書き）

ぜひとも感想評価お願いします。

おうし座1位の俺だぜ

キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴った。
俺は今、下駄箱にいる。

「おい！中村！もうチャイムなってるぞ！」
先生だ。　このセリフ、ほとんど毎朝聞く台詞だ。
「あ、はい、すいません。」

ガラガラッ
「おはようございます、中村君。2分遅れてますよ？」
担任にも言われる、同じ事を何度も言われると腹立つ。
「あ、はい、すいません。」

先生の長い連絡事項を聞き終え、授業が始まる。

「あぁーい、席つけぇー」

先生の華麗な登場だ。
コレは現国の先生、かなりダルそうな先生なんだ。

授業中いつも俺はあることをしている。
それは
『山本(やまもと)　春菜(はるな)の観察日記★』

ああ、山本春菜ってのは前話した俺の好きな人。

カワイイんだぞ、みんな見たら一目惚れしちゃうぞ。
まぁ、観察日記書いてる俺だが、
はたから見ると俗に言う「変態」ってやつだろうな。
まぁ、そう思われてもしょうがないだろ、と思っている。
人の目ばっかり気にしてたら生きていけねぇからな！（　ー、　Дー、）キリッ

「うあぁーい、授業終わりー、お疲れさん」

アァー、授業疲れるわ。
それよりなにより、春菜ちゃんは俺のことどう思ってんのかな？
こういうのって気になるよね、わかるかな、恋してる人々よ。

なんかさ、こう、いいタイミングでさ、春菜ちゃんの友達が
「ねぇねぇ、浩太のことどう思う？」
とか聞かないかな？
あり得ないか、うん。

「春菜ー！！」
「んー？あーちゃんどうしたの？」

あーちゃんっつーのは、春菜ちゃんの親友の
高橋（たかはし）　旭日（あさひ）だ。

「ねぇねぇ、浩太くんのことどう思う？」

キタ━━(ﾟ∀ﾟ)━(　ﾟ∀)━(　　ﾟ)━(　　)━(　　)━(ﾟ　　)━(∀ﾟ　)━(ﾟ∀ﾟ)━━!!
なにこの展開？！　さすがおうし座１位なだけアルぜ！！

「浩太くん？」
「そうそう！！ハルはどう思ってんのかな？って！」
「うーんとねぇ、あたしは…」

来い！来い！
良いコメント来い！

「かっこいいと思う！」

うぎゃぁー！
え？！え？！　マジかぁ！！

「でもね、ジンミッ」

ですよねぇー
帰宅部オールスターズですもんー

「アレで、性格優しかったら絶対もてると思う！」

性格か！よっしゃ！
イメチェンしようかな！

「性格良かったらハルは好きになる？」
「うーん、候補にはなる可能性もなくはない！」

イメチェン確定☆

「そっかぁ！ごめんね！イキナリ変なこと聞いて！」
「いやいや、いいんだよ！（笑）」

うわ、笑顔超可愛いし（＊／／／／∇／／／／＊）
惚れてまうやろォー！
いや、惚れてますけど。

キーンコーンカーンコーン

放課後です。

1日って早いものですね。
もう春菜ちゃんとお別れですか、早い。

「ハルー！一緒に帰ろォー！」
「あーちゃん、ごめん！あたしきょう部活あるんだ…！」

あ、そうか、春菜ちゃんは部活やってるんだ。
バスケ部だっけか、一度でいいから見てみたいなぁ

「そっかぁー、じゃぁ、仕方ないか！！」
「うん、ごめんねぇ！」
「いいよ！いいよ！うち違う人と帰るから！」
「うん、本当ごめん！」

さてと、俺も帰ろうかな。
一人でのたのたと帰るのがいつもの帰り道。

「浩太くん！一緒に帰ろ…！」

え？　えぇぇぇぇぇぇ！？
旭日が一緒に帰ろうだとぉー？

「え？あ、うん、いぃよ」
「やったぁ☆」

え、なにこの展開？！
女子と二人で帰るんんて初めてだ！
「うち、浩太くんと話すの初めてかも！」
「お、おぉ、そうだな」
「なんか、照れるねぇーっ！」

うお、何だこいつ…
け、結構カワイイじゃねぇか…！！

「家どの辺なのー？」
「あの、セブンの裏あたり」
「へぇー！結構近いんだね！」
「そ、そうだったんだ」

やべぇ、何だろうこの気持ち
なんか、変な感じする。

「あーちゃーん！！」
「あ、ゆうちゃん！」

うっわ、気まず！
え、なに、友達？
まじかよ、くっそ恥ずいじゃねぇかよ！
「お？お、お、お？　いい彼氏つれてんねぇ、あーちゃん！（笑）」

「や、やめてよぉー／／／」

か、彼氏…！！

「彼氏なんでしょー？（笑）」
「ちっ、違うよ！ただの友達だよ！」

友達…。
俺、友達いたんだ…。
旭日、俺のこと友達だと思ってくれてたんだ…！
「ねぇねぇ！イケメン君！どうなの？あーちゃんの事好きなの？（笑）」
「やっ、ゆうちゃん！！やめてよ！」

え？俺？

「い、いや、俺は別に…」
「ほ、ほらね！だから言ったでしょ！」
「なぁーっんだ！つまんないなぁ（笑）あ、ウチ家ここだから！」
「じゃぁーねー！」

やっといなくなった。
何か、もう、怖かったw

「ご、ごめんね浩太くん！」
「あぁ、気にすんな」
「ありがとう♪優しいねッ！！」

優しい……！？

俺って、優しいのか？！
もしかしてコレは、来たんじゃね？！
「浩太くんってさ、いっつもなにやってるの？」
「いや、特にこれといったことは…」

嘘つけ！
ゲームしかやってねぇだろ！
モンハンばっかだろ！

「そうなんだ！じゃぁさ、きょうこれから空いてる？」
「きょ、きょう？え、えっとー、う、うん。空いてるよ」

テンパり過ぎ！
俺テンパり過ぎ！
ってか、きょうウカムの最速タイムだすんじゃねぇのかよ！

「やったぁ☆じゃぁ、一緒に出かけよ！きょう、暇なんだァ！」
「そ、そうなんだ、俺でいいならね。」
「全然いいよ！むしろ浩太くんがいい！！」

俺がいいだと…！
嬉しいぞｗ

「じゃぁ、きょう帰ったら4時にセブンに集合ね！」
「わかった」
「じゃ、ウチこっちだから！」
「おう、じゃ」
「ばいばーい☆」

ふぅ

落ち着いたぜ。

きょう俺は初めて女子と二人で帰った挙句二人で遊ぶだと？

おうし座１位の力ハンパねぇ！

よっしゃ！

俺が持ってる中で一番おしゃれな服来ていこっと！

うし、準備完了！

行くか！

おうし座1位の俺だぜ（後書き）

感想、評価お願いいたします。

シャッター音は、人をも傷つける。

俺は待ち合わせ場所に向かった。

「浩太クーン！」
「あ、どうも」
「って、え?!ちょ…何そのカッコ！」

俺の中では一番のおしゃれだった。
なんか、すげぇショック。

「でも、浩太くんはそういうのが似合ってるのかもね！(笑)」

なんだそれ、褒めてんのか、バカにしてんのか
どっちにせよ、変なことには変わりないだろう。

「ようし！じゃぁ、行こっか！」
「…おぅ」

二人は歩き始めた。
特にこれといった場所はなかったため、うろちょろしてるだけだった。
俺は、結構面倒くさくなっていた。
と、そこで…

「ねぇねぇ、あれ知ってるー？」

旭日が何やら洒落たボックスを指さしていった。

「全く知らん」
「あれね、プリクラっていうんだよ！」

プリクラか…、なんか聞いたことあるなぁ。

「ここで問題です！」
「え？」
「プリクラとは、なんの略でしょうか！」

知らん！全然知らん！
プリクラだろ？
プリプリクラシック？
プリンくらいの大きさ？
全然分からん！

「あの、そういうの全く分かんないんだけど…」
「あ、ごめんごめん（笑）正解は、プリントクラブだよ！」
「へぇー」

知った所でどうしようもない知識ゲットだぜ！

「んでさ、あれ、行かない？」
「え、まぁ、いいけど、あれって何すんの？」
「写真撮るの！」
「ふ、二人で…？」
「そうだよ♪」

お、おぉ、まじか。
まあ、初ってことで、撮ってみてもいいかな

「へぇー、そうなんだー」
「いい？」
「うん」
「じゃぁ、行こう☆」

中に入るとそこはなんか変な感じがするボックスだった。
後ろには緑のシートがありこんな背景で写真取るのかと思いますます変な感じに

『お金を入れてね！』

え？！カネカカルノ？！

「今回は私がお金払ってあげる！」
「有り難き幸せ」

良かったぜ、こんな所で無駄金使ってる場合じゃないんだ！
旭日は、一人でキャッキャキャッキャキャしてる。

「ねぇ、浩太くんとるよー？ホラホラ、携帯いじってないで！」
「ん、あぁ、悪ぃ。」

携帯でツイッターしてたんだ
『プリントクラブなう』

「はい、チーズ☆」
パシャぁぁぁぁぁぁあ！！！

「ウオッ…！」
「どうしたの？」

「いや何でもない。」

音デケェ！
不意打ちだったぜ！！ｗｗ

「ここのプリクラシャッター音が異常だからね♪」

なぜ他のを選ばないのだ、小娘よ。

「もう一個撮ろ！」

「はい、チーズ☆」

パッシャぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！

うるっせぇよ！！
耳破裂するわ！

「よし、完成☆あとはでこるだけ♪」

デコってる間、暇な私です。
Ｔｗｉｔｔｅｒ「シャッター音は、凶器だった」

「できたよぉー！！」
「おぅ、さんきゅ」

デコるセンスがめちゃくちゃすごかった。
帰ったらＰＳＰにでもはろうかな。

それにしても、この辺は人が多い！
気持ち悪い！

最近は人馴れしてきたけど、でもやっぱり嫌いｗｗ
知ってる人とかなら結構行けるようになったぜ！！

俺はその後もさんざん旭日のショッピングに連れ回された。

「今日はありがとね！付き合ってくれて！」
「うん」
「じゃぁ、今日はこの辺で！」
「ノシ」

家に着き、まずはＰＣ起動。
それと同時進行でＰＳＰ起動。

早速モンハンを！！

「あ、そういえば」

きょう撮ったプリクラを見た。

「ＰＳＰに貼ろ」

ＰＳＰの裏面に貼った、意外といい。
自然と笑顔があふれた。

「よし！ウカムいこう！」

最善の装備で俺はウカムの狩りに向かった。

こんな時間を過ごしながら、現在時刻は、午前４時。

「ハンゲも飽きてきたなぁ。そろそろ寝るか」

俺は平均睡眠時間2~3時間と少なめ。
授業は寝ずに受けている。
もう、睡眠しない生活にも慣れている。
常にゲームやってる俺は目が悪い。
そんなもんでしょう。

「うし、寝よう。」

こうして、浩太の長い長い1日は幕を閉じた。

シャッター音は、人をも傷つける。（後書き）

感想評価お願いします。

一狩り行こうぜ

コケコッコー

朝ですわよ

俺はカーテンをズバッと開けた。

「うん、清々しい朝だ」

俺は太陽様にそういってから、朝ごはんを作り始めた。

実は、彼は幼いうちから両親を亡くしている。

物心がついたときにはもう一人暮らしをしていた。

「あっ…ウインナー焦げちゃった…」

料理は得意でもなく下手でもない、至って普通の腕前だ。

でも、周りの男子に比べるとなかなかできる方。

モテる要素の一つでもある。

「えっと…今日は…土曜日か、学校休みだ。　あ、きょう友人来るんだった。」

俺は、朝ごはんを食べ終わると食器を洗い、リビングの片付けを始めた。

一人暮らしだとそんなに散らかることがないため、片付けは結構早く終わった。

俺は友人が来るまで「いいとも！増刊号」を見ることにした。

「ったく…青木のやつ遅いなぁ…」

予定時間から10分遅れてインターホンが鳴った。
「やっときたよ…」
俺はモニターを見ず青木だと思いドアを開けてしまった。
ガチャッ
「はーい」
するとそこには…

青木が立っていた

青木　「おいっす」
俺　「おせぇし」
青木　「おいっす」
俺　「はいって」
青木　「おいっす」

俺は若干イラッとした。

こいつは、青木　遼太郎って名前だ。
もちろん、帰宅部オールスターズの一員だ！
今日はこいつと一狩り行く予定だ。

「まぁ、そこ座れよ」
「おぅ、さんきゅうでっす」

俺は冷蔵庫からコーラを取り出した。
すると後ろからものすごい視線を感じた。
そして俺はそのコーラを戻してオレンジジュースを手にした。

そうするとその視線は消えた。

「わかってらっしゃる」
「そういや青木、炭酸だめだったんだな」

俺はとりあえずPCを起動させた。
背景画像は２次元の世界へ引きずり込まれるかのような画像だ。

「おい、背景チルノじゃねぇのかよ。」
「俺は、チルノはそんなに推してねぇからな」
「わかってねぇなあ」

俺は真っ先にニヤニヤ動画のトップページを開いた。

『にーーやにーやどーがっ』

青木が口を開いた。
「モンハン行こうぜ」
「ん、あぁ、いいよ」
「なに行く？」
「そうだなぁ、俺今特に足りてない物はないんだが」
「んじゃぁさ、銀レウス手伝って。シルソル作りたいんだけど若干
足りないから」
「あ、いいよぉ」
「捕獲しますんで」
「了解。」

慣れた会話で話をすすめる。

「じゃ、準備おっけー？」

「いいよ」

「行きまーす」

『ぷぅぷぅー』

ここから、俺たちの銀レウスとの死闘が始まった

一狩り行こうぜ（後書き）

感想評価お願いします

モンハンの世界へようこそ

「さぁ、ショータイムだ。」

俺らは狩りの世界へ――――――――――

※これからは、ゲームの中にいるという設定で話を進めていきます？

ここは渓流。
上位クエストのため開始位置はバラバラだ。

「とりあえず合流しなきゃなー　千里眼でも飲むか」
ゴクッ　シュパキィーン！
「オォー、見える見える！」

俺は青木を探しに向かった。
「マップの６か」

一方その頃青木は…

「アイツのことだから千里眼でも飲んでこっち来るだろう、はちみつ採取でもしてるか！」

バサッバサッ　ズドォーン

「んー？何の音だ？　って、え…」

銀レウスの登場でーす。

ですが、まだ銀レウスは気付いてないようでーす。

「気づかれる前に逃げなきゃ…　抜き足差し足忍び足。抜き足差し足忍び足。」

キョロキョロ　キョロキョロ　ンー？　ギロッ！

「バ　レ　た　☆」

ダァーッシュ！！！！

逃げろぉー！！

そこに浩太がやってきた。

「おーっす、来たよぉー　って、なんにゃぁぁぁぁああああぁー！！！！」

「今くんのかよお前！逃げろ！とりま逃げろ！」

なぜ戦わないのかわからないが、逃げまわる二人。

そこで浩太が気付いた。

「おい！そういやお前、なんで逃げてんだよ！」

「え？」

「戦えよ！！」

「その手があったか！」

二人はやっと戦う気になった。

今度こそ俺たちの銀レウスとの死闘が始まる。

モンハンの世界へようこそ（後書き）

感想評価お願いします

戦闘開始

ここから、二人の死闘が始まる。
「よっしゃ、行くぜ！俺がこの大剣でぶった切ってやるよ！」
浩太は潔くそう言いながら、剣を構えた。
「俺様の双剣が火を噴くぜ！！」
青木は双剣にキスをした。
一瞬双剣が赤くなったように見えたのは気のせいだったのだろうか。
「ギャァァァァアアア！！！」
銀レウスは大きな声で咆哮した。
浩太は大きな大剣で咆哮をガードした。
そして、銀レウスは口元で大きな火の玉を作り、俺らに向かって3発はなった。
二人は見事すぎる前転で躱した。
「攻撃開始…」
青木がそうつぶやくと、双剣をクロスさせ天高く掲げ、鬼人化をした。
そして、目にも見えない速さで銀レウスを斬り刻む。
「これが俺の素晴らしき乱舞だ。」

銀レウスは前足で青木を叩きつけようとした。
しかし、そこには青木はいなかった。
もうすでに、銀レウスの懐にいた。
「ったく、遅いんだよ。ノロマちゃん」
再び目にも止まらぬ速さで切り刻んだ
浩太は重い大剣を担ぎながら、銀レウスの頭に向けて剣を振りかざした。
大剣は銀レウスの頭を一刀両断！
「隙だらけだぞ？」
浩太はそういうと大剣に力を溜めだした。
「うおぉぉぉぉぉおお！！！」
ズバアァァァァーン！！！
大きな大剣は銀レウスを斬りつけた。
銀レウスはあっという間に瀕死状態。
捕獲のチャンスだ。
「よし、罠を仕掛けるぞ。」
浩太が罠を仕掛けた。
すると、青木が罠の方へおびき寄せた。

ズボン！

綺麗に罠にはまった。
「行けっ！捕獲用麻酔玉（モンスターボール）！」
捕獲用麻酔玉（モンスターボール）は銀レウスに命中。
銀レウスは眠りについた。
そう、捕獲は成功したのだ。

「よし、捕獲完了」

この二人にとったら銀レウスなんてその気になれば、スズメのようなものだ。
寝顔がとても可愛い。

「おつかれぇー、はちみつ行こうぜ。」
「あ、俺もう行ったよ」
「マジカ、じゃぁ、一人で行ってくるわ」

こんな感じで俺達の戦いは終わった。

※ココから3次元へ戻ります？

浩太「うん、弱かったね、一人で行けないの？」
青木「いや、余裕だけどさ、毒になったとき結構困るんだよね」
浩太「あんなの余裕でかわせるしょ」
青木「マジで？俺結構食らうんだけど。」
浩太「まじかい、俺は、飛ぶときについでに火はいてくやつあるじ

ゃん、あれめっちゃ喰らう。」
青木「いや、あれは余裕のよっちゃんで躱せる。」

やはり、プレイにも個性があるようだ。

青木「もうこんな時間か、俺帰るかな」
浩太「マジで？早くね」
青木「きょう、用事あるんだよね」
浩太「マジか！じゃあ、また明後日ね」

こんな感じでいつも一日を過ごす。
浩太は片付けを始める。
また、今日もニヤニヤ動画の生放送を開始する。
いつも2時間くらい放送する。
そのあとは録画していたテレビをみたり、借りてきたＤＶＤを見たり。
そうして、浩太の長い一日は幕を閉じた。

戦闘開始（後書き）

感想評価お願いします

暗黒のメール

朝、目が覚めた。
そりゃそうだ。

いつもどおり飯を作って、飯をくって。
片付けをして、ゆっくりする。
そして出かけようと思い玄関に向かった。
すると、郵便受けになにか黒い封筒があった。

「ん？なんだこれ…」

その封筒には、なにも書いてなかった。
とりあえず中身を開けてみた。
そこには一枚の手紙が

「な、何だと…？！」

浩太の体から汗がたらたらたれてきた。
その手紙にはこう書いてあった。

『お前の今一番大切な人を拉致した。今日の午後9時に碧唯凱旋門（あおいがいせんもん）に来い。』

その手紙の一文字一文字の字体が違った。
とても奇妙なものだった。

「どういうことだ…。俺の、今一番大切な人…。まさか…、春菜ち

ゃん…！！！」

浩太は一体何が起こっているのか、なぜあいつが拉致されたのかがわからず、混乱状態へ陥ってしまった。

「何故だ…何故だ…何があったんだ…！！」

俺は午後9時までそわそわして待ちきれなかった。
そして、午後の9時になった。
浩太はちょうどジャストに碧唯凱旋門についた。
するとそこにはたくさんの人だかりができていた。
そして、チャイムが鳴った。
ジリリリリリリ…！！！
すると、大きな門が開いた。
みんな一斉に中へ入っていった。
それに流れるように浩太もなかへと入っていった。

中は広かった。
ステージのようなところにスポットライトが当てられた。

「さぁ、皆さん！お越しいただき誠に有難う御座います！」

タキシードをきた男の人がそういった。
すると周りに人たちは

「どういうことだ！」「俺の嫁さんを返せ！」「急に拉致して何がしたいんだ！！」

みんな、浩太と同じ理由で集まってるらしい。

「静かに！今は質問時間ではありません。勝手に口を開いたものは処罰を与えますからね。気をつけて。」

男性がそう言うと周りは一気に静まり返った。

「申し遅れましたが、私は　奥村（おくむら）　拓哉（たくや）と申します。」

彼は律儀に深く礼をしたあとまた淡々と説明を始めた。

「ようこそ、世界最恐のゲームへ。」

心の声ーゲームだと？ふざけんな。俺は春菜ちゃんを助けに来たんだ。ゲームなんかやってる場合じゃない！

「これより、ルールの説明をします。ルールは至って簡単！」

そういうと後ろからスクリーンが降りてきた。

「まずはこちらをご覧ください。」

すると、スクリーンにある映像が流された。
そこには手足口を縛られた状態で吊るされてる沢山の人達が。
そこに、春菜ちゃんがいた。

「…！！春菜ちゃん…！！！！」

思わず声を出してしまった。

「おい！誰だ今喋ったやつ！！出てこい！」

浩太は危険は察知したのか、名乗り出ることはなかった。
だが、周りの人は誰が喋ったか知っていた。
みんな俺の方へ視線を向けた。

「ほう、君か。ちょっと前へ来い。」

すると、近くにいたＳＰに掴まれ、前に連れて行かされた。

「何だ、君。先ほど喋るなといったはずだ。いい度胸じゃないか。」

そいつの顔は悪に染まっていた。

「駄目だ…こんなの、駄目だ……！」

浩太はついついそう言葉にしてしまった。

「何だ、私に文句でもあるのか？え？」

浩太は、我慢しきれず言ってしまった。

「こんなの止めにしよう…いったい俺らがなにをやったって言うんだ…！　俺たちの大切な人を拉致してなになるってんだ！　いったい何が目的なんだ？　俺らをこんな思いにさせて、何が楽しいんだ！」

浩太は思ってることすべてをいった。

「ふっ、面白い。こんな奴がいるとはな…　おい、こいつ、このまま生かしとけ。」

拓哉がそう言うとＳＰがまた浩太をみんながいる方へと連れていってくれた。

「さて、取り乱して済まない。ルール説明の続きだ。いま見てもらったように、お前らの一番大切だと思っている人をこのようにして牢獄へ入れてる。そして、ここからこいつらのいのちをかけたゲームの始まりだ。何個かのステージに分けて人数を減らしていく。このゲームで残った一人だけが、大切な人と一緒に元の場所へ戻れる！！だがしかし、それ以外のヤツらは、そのまま野放しにされ、大切な人は死ぬ。ルールは以上。あとは各ステージに進むごとに説明する。いいな。」

拓哉はそう言うと、ステージから降り、何処かへ歩いていった。

「死ぬ…だと…？　ふざけんじゃねぇよ…　どんなゲームか分からない。何が起きるかわからない。でも、俺は春菜ちゃんのために絶対１位になってみせる。生き延びてみせる！！」

そうしてこれから、悪夢のゲームが始まる。

暗黒のメール（後書き）

感想評価お願いします

１rdSTAGE　ルール説明

「はい、みなさーん、ちゅうもーく」
拓哉がそう言って、ステージに登った。
そして、みんなの視線は拓哉に集まった。
「それでは！ファーストステージを開始します！」
多少のザワつきがあった。
ここでは何が起きるかわからない。
常に警戒しておくことにした。
「一回しか言わないですからねー、ちゃんと聞いててくださいねー、難しいですからねー」
俺はゴクリとつばをのんだ。
手汗が半端ない。
「それでは、ルール説明にはりますが、その前に！２人１組のパートナーを作って下さい。」
パートナーだと？
一体何をしようとしているんだ…。
とにかく今はパートナーを探さなきゃ。
「あのぉー、すいませーん。　えくすきゅーずみー。」
「あ、はい。」

一人のカワイイ系の男の人が話しかけてきた。
「僕と、パートナーになってもらえませんか？　あの、さっきのやつ見て、すごいなぁって思ったんです。一緒にいれば、死なない可能性上がるかなぁって。よろしいでしょうか？」
パートナーに誘われた。
「まぁ、はい、いいですよ」
やった、パートナーが出来た！
さっきのやつみんな見てたから来ないかなと思ったら逆に来た！
「あの、僕、梶原（かじわら）　祐悟（ゆうご）といいます、よろしくお願いします！」
「あぁ、おれは中村　浩太。よろしく」
祐悟は絶対もててると思う。
カワイイ系でもてもてると思う。絶対。
「はーい、皆さん、パートナーで来ましたかー？」
そして、また説明を始めた。
拓哉は周りの様子を見て、出来てたことを確認。
「はい、ルール説明をします！まずは、皆さんにこの「ヒュペノイドバッチ」を、お配りします」
すると、ＳＰたちが一人一人にこの「ヒュペノイドバッチ」を配り始めた。
数分たって、拓哉が口を開いた。

「皆さんの手に渡ったようなので説明します。このバッチは、いわゆるライフです。」

と言うことは、このバッチがなくなったら負けってことか。負けることは死ぬことだ。気をつけよう。

「今回はトランプゲーです。トランプ4種類の1～5とジョーカーのカードを使用します。それを、赤と黒のカードで二種類にわけます。そして、パートナーと二人でその固まりを分けて下さい。ちなみに、ジョーカーにも赤と黒があるのでそちらも分けて下さい。それが持ち主の手札です。パートナー同士で勝負します。まずはジャンケンをし、先攻後攻を決めます。そして、先攻からカードを裏向きにおいていきます。その時、置くカードの名前を宣言しながら伏せます。そこで嘘をついても構いません。たとえば、ダイヤの3を伏せながら”スペードの4”といってもいいということです。そこで相手がカードを伏せた時、それが嘘だと思えば”チェック”と、本当のことを言っていると思えば”通し”といって下さい。チェックした場合に、それが嘘だった場合、嘘ついたプレイヤーはそこにあるカードをすべて手札に加えます。もしチェックした場合に相手が宣言通りのカードを出していた、場合そこに溜まっていたカードをすべて自分の手札に加えます。通しの場合はいちいち確認しません。そして、最終的に手札が先になくなった人が勝ちです。勝った場合相手のバッチを自分につけ、ゲーム終了です。まず、ここまでで何か質問は？」

長い！長すぎる！

でも、大体は把握できた。

未だ有るのか、難しいゲームだな。

「無いようですね、では、続けます。出すときのルールです。自分がカードを伏せるときにルールがあります。相手が宣言したカードと、マーク、もしくは数字が同じでなければいけません。もし、出すカードがない場合はパスをしてもいいです。パスは、出すカードがないときにかぎらず、いつでも使えます。それと、このゲームはターン制です。先攻がカードを伏せ、後攻がカードを伏せる。これで1ターンです。そして、1ターンの間に両者の手札がなくなってしまった場合、特別ルールとしてどちらも勝ちということになります。勝った人はセカンドステージに行けます。最後に、ジョーカーチェックを説明します。ジョーカーは、なににでも化けることができるカードです。ハートの2と言いながらジョーカーを出したとします。そこで相手がチェックといってきて、確認した場合、ジョーカーはハートの2に化けているので、相手のチェックミスとなります。しかし、自分がジョーカーを伏せた状態で、相手が”ジョーカーチェック”と言った場合、ジョーカーを見ぬいたという事で、ジョーカーチェックされたほうが、強制的に負けとなります。逆にジョーカーチェックでミスをした場合、ミスをした側が負けとなります。以上で説明を終わります。」

やっと説明が終わった。
ルールは結構難しいようだ。
これは、ただの運ゲーに見せかけた、心理ゲーだ。

「それでは、向こうに個室がございますので、そこでパートナーと勝負して下さい。勝者は、私のところへ来てください。負けた方はその個室で死ぬことになります。」

死ぬのか。やっぱ死ぬのか。
みんな、想像できていたのか、なにも言動を発しなかった。

「浩太くん、ちょっといいですか？」

祐悟が話しかけてきた。

「僕に、作戦があるんです。この作戦通りに行けば、二人とも2ndSTAGEにいけますよ！！」

「(;゚Д゚)(゚Д゚;(゚Д゚;)ナ、ナンダッテー！！」

祐悟の作戦とは一体――――――

１ｒｄＳＴＡＧＥ　ルール説明（後書き）

感想評価お願いします

ここは騙し合いのゲーム。

「（；゜Д゜）（゜Д゜；（゜Д゜；）ナ、ナンダッテー！！」

俺は、びっくりしてしまった。

こんな奴が、作戦を立てるなんて。

「はい！この作戦通りに行けば、二人とも２ｎｄＳＴＡＧＥにいけます」

「ほ、本当か！そ、そ、そ、その作戦ってどんな奴なんだ？！」

俺は、一刻も早くその作戦を聞きたかった。

「説明しますね。まず僕からです。僕がまずはじめに、ジョーカーをだす。その次にあなたが、何かの１を伏せて下さい。その後、僕が１を伏せます。そしてあなたが１を出し、また僕が１をだす。そうすると、１が４枚使われましたので、１はもうなくなります。そして次にあなたはパスをします。そうするとまた僕のばんです。そして、最後に出した１と同じマークの２を出します。その後、あなたは何かの２を伏せます。その次僕が２を、あなたが２を伏せます。次は僕のばんですが、もう２は４枚使ってしまっているのでパスをします。そしてあなたがそのマークと同じ３をだす。これを繰り返すと、最後の５を僕が出し、ラストにあなたがジョーカーをだす、そうすると１ターンの間に二人とも手札がなくなるため、どちらも勝ちとなるわけです！！」

「すごぉーい、よくそんなの思いついたなｗｗ」

感動している浩太。
スーパードヤ顔を浮かべる祐悟。

「はい、それでは！準備ができた組は向こうの個室でバトルしてきて下さい。勝者は私の方へ伝えに来て下さい。」

拓哉がそう説明を付け足した。
ついにバトルが始まる。
だがしかし、最強の作戦のおかげで無事２ｎｄＳＴＡＧＥに行けそうだ！

「それじゃぁ、早速行きましょう♪」
「おぅ！」

個室の中へ入った。
そこはテーブルが１台あるだけであり、他にはなにもなく、薄暗いところだった。

「じゃあ、はじめましょう。僕からですね。ジョーカーです。」
「通しだ　クローバーの１」
「通しです　ハートの１」
「通しだ！　スペードの１！」
「通しですね　ダイヤの１！」
「よし、じゃあ、俺はパスだ！」

このまま行けば、俺らはｒｎｄＳＡＴＧＥへ！

「ダイヤの2です！」
「通しだ！　スペードの２！」
「通しです　ハートの２！」

「通し！　クローバーの２！」
「僕はパスをします！」
「じゃあ、クローバーの３！」
「通しです　ハートの３！」
「通し！　スペードの３！」
「通しですね！　ダイヤの３！」
「俺はパスだ！！」

よっしゃァ！まってろよ！春菜ちゃん！

「では、ダイヤの４！」
「通し　スペードの４！」
「通しです　ハートの４！」
「通し！　クローバーの４」
「僕はパスを選択します！」
「よし！クローバーの５だ！」
「通しです　ハートの５！」
「通しだ！！　スペードの５だ！」
「通しです！！！　ダイヤの５！！！」
「ここで俺がジョーカーだ！！！」
「……ジョーカーチェック。」
「…え？」

ど、どういうことだ?
ジョーカーチェックだと…？！

「おい…祐悟…？」
「…クックックック……お前は馬鹿だ…馬鹿だな！！！」
「なに…？！」
「俺の作戦通りに動いてくれちゃってよぉ…！」

「騙したのかてめぇ！！！」
「さっきのあの行動を見て、こいつは早く潰さないとなと思ったんだ。」
「…くそっ」
「ありがとよ…！　ごちそうさま…」

祐悟は嘘をついていたのだ。
自分が勝てるように、うまく積み上げて。
二人の勝ち登っていくかのように見せ立ててだ。

「……ぷっ」
「なにを笑ってるんだ、中村ァ。今のお前に笑う暇なんかあんのか？死ぬんだぞ？」
「…確かに、俺は馬鹿だ…でもなぁ……オメェのほうがバカなんだ…！！」
「なにを言うかと思えば、戯言か。」
「これを見ろよ…。」

浩太は捨て札の一番上のカードをめくった。
そこには、クローバーの3があった。

「?！」
「ジョーカチェックといったな…、祐悟…。」
「ど、どういうことだ貴様…！」
「お前の作戦通りに動くはずがねぇだろ、馬鹿が」
「なんだと！？」
「俺は、人間が嫌いなんだよ。だから、お前のことを信じるはずがないだろ…。」
「ふざけんじゃねぇよ！！！」
「ジョーカーチェックミスだ。残念だったなぁ　愚か者が…」

「…ちくしょう……」

浩太は、祐悟のバッチを無理くり取り上げた。
そして個室から去ってった。

「…ちくしょう！！！なんでだよ…ちくしょう…ちくしょう…ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

個室から悲鳴が聞こえた浩太は見向きもせず、拓哉の元へといった。
そして祐悟のバッチを渡した。

「今のゲームはモニターで見させてもらったよ。面白いじゃないか。」
「うるせぇよ　おれはとっとと2ndSTAGEに行きてぇんだ。」
「まぁまぁ、そう早まるなよ。　まだ終わってないヤツらもいる。ゆっくりしてろ。　あ、それと！このバッチ付けてろ、ライフは多いほうがいいだろ。」
「あぁ、そうだな。ありがとよ」

一方その頃春菜達は――――――

「おい！54番！助けに来てくれたやつだぞ！」
「み……美咲！！」
「あ…あn………あなた…」
「美咲……悪い…お前を守れなくて…」
「…いいのよ……気にしないで…」
「美咲ぃ…くそぉ……美咲ィィ…！！」
「おい、お話は済んだか？行くぞ。」

その後二人は殺された。
ここは騙し合いのゲーム。
いつでも疑いの目を忘れないようにしなければならない。
浩太のいのちは、何処まで続くのであろうか…
「まってろよ…春菜ちゃん……今行くからな…。」

ここは騙し合いのゲーム。（後書き）

感想評価お願いします

１ｒｄＳＴＡＧＥ　終了のお知らせ

２ｎｄＳＴＡＧＥが始まるまで、まだ時間がたっぷりある。
この時間を無駄にする訳にはいかない。
浩太は持参してたカバンから黒いポーチを取り出した。
そのポーチからはなんとＰＳＰが出てきた。
浩太はＰＳＰを肌身離さず所持している。
そして、モンハンを始めた。
モンハンプレイ時間ー１４５７時間
真のオタクだ。
世界のモンハンプレイヤーが認めるネ申プレイヤーである。
よくある改造データよりも強い。

「さてと、なに行こうかな。うーん、今暇だからなぁ、《終焉を喰らう者》でいいや」

なんと、村クエでありながらも上位級のレベルのヤツらが出てくるあのクエストだ。
一応村クエのため、一人でしかやることはできない。
だから、これをクリアしてる人は相当な腕があると考えてもいいだろう。
浩太はこれを軽く１００回はクリアしている。
しかも、１０分かからずと終わらせてしまう。
すごすぎる。さすがネ申プレイヤーだ。
すると今度はアイフォンを開きだした。
何やらＴｗｉｔｔｅｒをやっているようだ。
「終焉を喰らう者なう」
こんなことを書きこむほど暇なようだ。

――数時間後

浩太はモンハンに飽きたのか、急に電源を切り、立ち歩き出した。
浩太の向かう先にはＷ，Ｃ，があった。

「ワールドカップ遠いな。あ、ワールドカップっていうのはトイレのことだよ。」

なぜ、ワールドカップ＝トイレになるかって？
簡単だよ。Ｗ，Ｃってワールドカップと読めるだろう。
浩太はこんな変なところに頭がよく回るが
ちゃんとした勉強は全くできないｏｒｚ

「（´Д｀）＝3　フゥ　気持ちかった」

浩太はしばらく我慢していたようだ

「さてと、ひまだなぁ、ニヤ動でも見てよっと。」

浩太はニヤニヤ動画でアニメを見だした。
すごい集中力だ。
目をキンキンに開いてみている。
よっぽどアニメが好きなんだろう。

「うほっ、ツンデレ最高だ／／／」

ひとりごとも多くなってしまうらしく
浩太はブツブツしゃべっている
はたから見ると変質者だ。

――また数時間後

「はいはーい、みなさん。１ｒｄＳＴＡＧＥが終了しましたよっ」

浩太はアニメに夢中で拓哉の声が耳に入ってきていないようだった。

「ちょ、ちょっと、君。説明始まっちゃうよ」

心優しい女性の方が教えてくれたお陰で

浩太はふっと我に返った。

「あ、あぁ、さんきゅうな姉ちゃん」

浩太はそう礼を言うと

そそくさとはしって逃げてしまった。

「すたこらさっさ　あ　すたこらさっさ」

浩太は一人でそう言いながら走っていった

向かう先はワールドカップだった。

「それでは皆さん！これから２ｎｄＳＴＡＧＥに入ります！　このゲームの参加者は全部で６８名。そしてこの１ｒｄＳＴＡＧＥで半分の人たちが死にましたので３４名が２ｎｄＳＴＡＧＥにいけます！」

うおおおおおおと歓声が上がった。

「そして、この２ｎｄＳＴＡＧＥから３ｒｄＳＴＡＧＥにいけるの

は、なんとわずか１０名です」

会場は緊張感に包まれた。
空気はピリピリしている。
浩太がワールドカップから出てきた。

「うっは〜！すっきりした！」

浩太の声は会場全体に響き渡った。
みんなが一斉に浩太に視線を集めた。

「え、あ、その……」

空気が読めた浩太はしょぼしょぼとみんながいる方に向かった。
「取り乱してしまいましたが、説明を開始します！」

２ｎｄＳＴＡＧＥは一体どんなものなのか―――

１ｒｄＳＴＡＧＥ　終了のお知らせ（後書き）

感想評価お願いします

二度と生きたいなんて言うんじゃねえ

拓哉が2ndSTAGEの説明を開始した。

「2ndSTAGEは、運動会です！」
「はぁ？運動会？」

浩太はふざけてるのかと言いたげな顔でそういった。
すると、一人の男性がこういった。

「運動会だぁ？ふざけてんのか！！」

浩太が言いたかったことを何の躊躇（ためらい）いもなく言い放った。

「ええ、ふざけてますよ」

拓哉はニコニコしながら答えた。
すると周りの人達が一斉に批判の声を上げた。
そりゃそうだ、こっちは命がかかってる。
命をかけたゲームをふざけてやっているということだ。
そうりゃみんな腹立つのもわかる。

「こっちは命かかってんだぞ！！」

一人の威勢のいい男性がそういった。
拓哉はこう即答した。
「命がかかってるからこそ、楽しむんじゃないですか。貴様らのほ

とんどはここで死ぬ運命なんだ。最後に少しでも楽しみたいだろ？」

拓哉の言葉は一同を唖然とさせた。
こいつは…人が死ぬのを楽しんでやがる。
みんながそう解釈したなか、浩太はわかってなかった。

「運動会か、面白そうだな！」

浩太がまたＫＹ発言した。
だが、浩太は気付いてないようだった。

「楽しむときは、とことん楽しもうぜ！そして自分の力で勝つんだ！」

周りの人達はこうたがなにを言ってるか分かんなかった。
もし、それで他の人が勝てば、自分は死ぬんだ。
それなのにあいつは、なにを考えているんだ。
みんな、そう言わんばかりの表情を浮かべていた。

「みんなはどうせ、負けたら死ぬって考えてんだろ？」

浩太がそういった。
みんなの視線が浩太に集まる。

「んなこと考えてっからだめなんだよ！」

浩太の表情が変わった。
今まではおちゃらけた奴だったが、急に真剣な顔になった。

「勝って生きることだけを考えろ　んなこともできねぇ奴が”生き

たい”なんて口にすんじゃねえ」
その言葉はみんなの心に響いた。
「わかったか！」
『おおおおお！！！！！』
みんなとの心がひとつになった瞬間だった。
「ふっ、くだらない。所詮戯言だ」
拓哉がそう言うとみんなが批判コメを浴びせた。
拓哉は批判コメに耐え切れず
「うるっせぇんだよ！！！！」
と叫んでしまった。
「お前ら…どうせ死ぬんだぞ？それが速いか遅いか、ただそれだけだ。なにに感動してるんだ？そんな友情ごっこ、さっさとやめてしまえ」
拓哉が放った言葉は、みんなの怒りゲージをＭＡＸにさせた。
みんなは怒りを抑えきれなかった。
「ぜってぇ、俺が1位になって、お前らみてぇなヤツらを全員ぶっ潰す！！」
拓哉はそんな言葉は聞きもせず、説明を再開した。
「今回の運動会は、障害物リレーです。順位の1位から１０位までが３ｒｄＳＴＡＧＥに行けます。ルールなんて有りません、とりあ

えず障害物を乗り越えて先にゴールすればいいのです。」

なんとも簡単なＳＴＡＧＥだ。

「よし、やってやらァ！！！」

みんなはやる気満々だった。

「それでは、運動場へ移動して下さい。」

移動するとそこには障害物がそびえ立っていた。

「全部で６個の障害物があります。これを乗り越えない限りゴールできません、せいぜい死なないよう頑張ってください。」

拓哉は呆れた顔でスタートラインへと向かった。

「こっちに来て下さい、ここからｓｔａｒｔです。」

２ｎｄＳＴＡＧＥが始まる。

絶対春菜ちゃんを助ける！！

拓哉が拳銃を空に向けた。

「よーい…　パァァアン！！！」

二度と生きたいなんて言うんじゃねえ（後書き）

感想評価お願いします

大運動会開催

てーんててててーんてててててん
てーんてーんてーてーてー
てーてーてーてーてーてーてー

グルメレースが華麗になりだした。

「ちくしょう！何処までふざけとんじゃ！」

こうたがさけんだ
すると、拓哉がこういう。

「はい、はしってはしって、遅いですよ皆さぁーん」

そんな言葉は無視して走る。
まずは大きな壁を登る。
壁は網状になってるため登りやすい。

「よいさっよいさっあらほいさっさ」

何とか登り終えた。
だが降りるときに網に引っかかってしまい。
飛び降りたが、顔面から落ちてしまった。
拓哉は腹を抱えて笑っていた。

「いってぇよぉ……」

顔を抑えながらも走る浩太。

「走れエロス！！」

拓哉は浩太に向かってそういった

「誰がエロスじゃ！！」

浩太はそう突っ込んだ。
そんな余計なことしている間に
浩太は最後尾になってしまった。

「ぬあぁー！最下位やんけ！！」

浩太は全速力で走った。
だが直ぐに次の障害物が…。

次の障害物はよくありがちな
「吊るされたパンを飛んで食べる」
っていうやつだ。
浩太は飛んだ。飛んだ飛んだ。
飛んだと言うより、跳ねた。
幸い浩太は背が高い方だったためそこはすんなりクリアした。
すると浩太は一気に3位まで上がった。

「よっしゃぃ！」

みんなはまだぴょんぴょこ跳ねてる。
そんななか浩太はドヤ顔で走り続けた。

浩太は滑らせてパンを落としてしまった。
すると拓哉が
「パンは全部食べなければいけません、落とした場合はもう一度パンにかぶりついて下さい。」
と言った。
ということはもう一度戻って跳ねてこいということだ。
「ええぇぇぇー？！」

大運動会開催（後書き）

感想評価お願いします

自分の意志を意地でも貫く男。

「また戻んのかよ！」

ダッシュで戻ってパンに食らいつく。
だがしかし、パンが揺れて咥えるもんも咥えれない。
１０回くらい跳ねてパンを口にした。

「もっふぁ！まっふぉまふぇ！（よっしゃ！やっとだぜ！）」

浩太は走った。
また後ろの方になってしまった。
しかしながらパンを落とす奴は浩太の他にもたくさんいた。
浩太は心のなかで「m９（^Д^）９mザマァ」と言いながら走っていた。

次の障害物は泥沼だった。
プールのようになっていて、そこには泥沼が満杯になっている。
そこを泳いで向こうへ行かなければならない。

「まじかよ…」

みんなは生きるのに必死で泥沼の中をぶしゃぶしゃと泳いでいた。
だけど、浩太は違った。
「汚いのだけは絶対に（׳・д・、）ヤダ」
という考えだけは捨てなかった。
すると浩太はプールのヘリをダッシュで駆け抜けた。

それを見た拓哉はニヤリと笑って

「プールサイドでは滑る危険性がありますので走るのはお控え下さい。大変危険なのでおやめ下さい。」
そんな言葉なんて気にせずに浩太は走る。
だがしかし、案の定浩太はおもいっきり滑った。

「うわあっ！！」

ばっちゃーんという音と共に浩太は泥沼の餌食に。

「ヒャァー！きったねぇー！！！」

服は茶色になってしまった。
なによりもくさい。
だが、ゴールはもう少しだ。
浩太は仕方なく泳いで向こう側へとたどり着いた。

「ちくしょー！」

やっちまったという表情を浮かべる浩太。
だがしかしこんな所で止まってる場合じゃない。
浩太は走りだした。
そしてそこにはまた障害物が。

「おいおい、まじっすか…？」

そこには、皿に小麦が大量にのせられているのがたくさんあった。
もう、パッと見で分かった。
浩太は一気にその小麦に顔を入れた。
浩太はすごい勢いで小麦を吹き消していく。
するとそこには飴があった。

その飴を口に含んで浩太は走った。

「すごいですねー！中村君！1位です！」

拓哉が大きな声でそういった。
浩太は少し安心した。
だがしかし！！
走っているときに油断してしまい、飴を丸呑みしてしまった。
そして喉につまらせた。

「！！！」

胸に手を当ててひざを地面につける。

「くっ…ゲホッ…ゲホッ……（´Ж`；）ォ・・ォエッ・・・」

すると後ろから走ってくる奴に背中をおもいっきり蹴られた。

「ぐおおお？！」

浩太の口から綺麗な曲線を描くように飴が飛び出した。
しかし浩太も馬鹿じゃない。
きっと落としてはいけないと思ったのだろう。
ヘッドダイビングをして飴を再び口の中へ入れた。

「ぎ…ぎりぎりせぇーふ……」

浩太は落とさずに済んだ。

「あっ！！」

後ろから走ってきた奴が飴を落とした。
浩太は心のなかで「m9（＾Д＾）9mザマァ」と思った。
すると拓哉がこういった。
「飴は落としてもやり直しにはならないですよー＾＾」
「何じゃとぉー？！」
浩太は大声で叫んだ。
そして拓哉は大爆笑。
「そんな事してる間に次々と抜かれてますよーww」
拓哉がそう言ってくれた。
それを聞いた浩太は走りだした。

自分の意志を意地でも貫く男。（後書き）

感想評価お願いします

バナナの皮に引っかかるやつを見てみたい

最後の障害物が見えてきた。
なんと最後の障害物はハードルだった。
しかし、そのハードルはかなり高かった。
１５０ｃｍはあるだろう。

「どうやって飛べと」

浩太は走りながら考えた。
そしてひらめいた。

「よし、潜ろう」

ハードルのしたをくぐって走りぬいた。
他の人達は頑張って飛んでいたがこうたのを見て唖然としていた。
そして他のヤツらも同じく潜りだした。
そして浩太はそのまま1位で独走！
ゴールまでもう少しだ！
すると地面にあるものが落ちていた。
バナナの皮だ。
「ベタか！ヾ（・ε・。）」
華麗なツッコミを入れつつ躱す。
そして浩太は見事1位でゴール♪

「よっしゃァー！」

他の１０人もすぐにゴールした。

そして１０位以下の人たちは人生の終わりを告げた。

「(´・ω・｀)ゞ　乙であります！」

浩太はみんなに向かってそういった。
すると１０位以下の人たちが一斉に叫びだした。
悔しいんだろう。
そうだろう。
浩太はやっぱり心のなかで「m９（＾Д＾）９mザマァ」と思っていた。
人間が嫌いな浩太にとってこんなものなんにも感じなかった。

「はい、合格者はこちらへ来てくださーい。」
拓哉が指示を出すと、１０人が集まった。
「あなた達は見事３ｒｄＳＴＡＧＥ進出です♪」
小さいが拍手が起きた。
周りの人達を見ると
強そうな奴もいれば超弱そうなのもいる。
イケメンもいれば不細工もいる。
いろんな個性があるんだなと改めて感じた。
他の落ちたヤツらは、後ろの方にいる。滞在する。ｓｔａy.
そうｓｔａｙしているのだ。

「３ｒｄＳＴＡＧＥまで時間がありますので、少々自由を楽しんで下さい」

ということでまた自由時間が始まった。
とりあえず浩太は寝る。

「みんなおやすみ　ｚｚｚ」

バナナの皮に引っかかるやつを見てみたい（後書き）

感想評価お願いします

オリオン座のしたで…。

目が覚めるとそこには誰もいなかった。
ように見えた。
後ろにみんないたのだ。
びっくりしました。

「（　゜Д゜）」オーイ！少年！」

呼ばれた。

「呼んだか！おっさん！」

おっさんはこっちに両手を広げながらスーパーダッシュ？
そして

「ミラクル☆ラリアット」

俺は首元にミラクルラリアットを食らった。
息ができない…w

「誰がおっさんじゃ！」

てっぺん禿げてる奴がよく言うよ。
誰が見てもおっさんだぞ。

「俺はまだ23だ！」

若い！若ハゲだ！ストレスか？！

「お、お若いですね…」

「そ、そうか…？／／／」

何照れてんだこいつ。

かわいくもなんとも無い。

「とりあえずこっちに来い！3rdSTAGEの説明がある！」

おっさんに連れていかれた。

「っと、済まない！俺は藤崎（ふじさき）雅之（まさゆき）だ！」

「おぉ、俺は、中村こうたです…。」

「よろしくなっ！」

おっさんは最高のエンジェルスマイルを浮かべていった。

「はいはーい、皆さん集まりましたねぇー」

拓哉がごきげんそうに言った。

「3rdSTAGEでは、ちょっとハードなことをしてもらいます！なので今ヌチにゆっくり睡眠をとっておいて下さい！　以上です」

拓哉はそう言うとそそくさと何処かへ行ってしまった。

「らしいぜ、みんな。とりあえず寝ようぜ」

浩太はいち早く寝たいようだ。
すると浩太はたったまま目をつぶりはじめた。

「そんな寝方で大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題ない」

そういうと浩太はすぐにいびきを出して寝た。

「じゃぁ、俺らも寝ようぜ」

藤崎がそう言うとみんな座って寝だした。
浩太の寝言が炸裂する。

「お前は（ぴー）の豚なんだよ……犬と（ぴー）牛と（ぴー）豚と（ぴー）…俺は（ぴー）お前も（ぴー）…」

エンドレスループが続いた。
藤崎は頭に来て
「ぬオォォ！！！」
と言いながら起き上がり、両手を水平に広げた。

「ミラクル☆ラリアット」

浩太の首に命中。
そのまま浩太は吹っ飛ばされた。
だがしかし、浩太は寝ている。
そしてエンドレスループは続いている。

浩太はみんなの睡眠を最悪な睡眠へと変えた。
そして…

「さぁ、みなさん。３ｒｄＳＴＡＧＥの開幕です！！」

オリオン座のしたで…。（後書き）

感想評価お願いします

サバイバルっておっかない

「3rdSTAGEは、サバイバルです」

サバイバルって言ったら
殺し合いしか想像できないが
まさかそれはないよね
一体何なんだろうか

「サバイバルではみなさんに殺しあってもらいます」

え？今なんて？
それはないでしょうよ
おかしいでしょうよ
殺し合いはないでしょうよ

「うるさいぞ、ざわざわうるさいぞ」

心のざわつきを読み取ったのか
表情で読み取ったのか
素晴らしいやつですな

「という訳で、皆さんには拳銃を配布します。銃弾は3発です。」
「少ないよ！」
一人の青年がそう訴えた。
そんな物聞く耳も持たず説明を続けた

「これはモノホンなので気をつけて。」

モノホンの拳銃を手にしたのは初めてだ。

それ故に浩太は２８２８してしまった。

「おぉ、中村。楽しそうなカオしてんな」

「べ、べつに…なんでもねぇよ！」

強がってしまった自分が恥ずかしい

隣のやつが鼻で笑ったのが聞こえた。

まずはこいつから殺す☆

「それではみなさん、特設ステージへ移動しますよ」

みんなはテコテコ歩き出した

いよいよ３ｒｄＳＴＡＧＥが始まるのだ…！

サバイバルっておっかない（後書き）

感想評価お願いします

ピンクのジャケット。僕は忘れない。

移動を終えてＳＴＡＧＥに入った。
そこは、ほとんど何もない殺風景。
こんな所で撃ち合いしたらすぐ終わっちまう。

「ゲームスタート」

急にゲームが始まった。
すると

パアァァン！

銃声だ。
発砲したのだ。
そこには頭を見事に撃ち抜かれた死体があった。
撃ったのは、１８くらいの青年だった。

「オラ、油断すんな、ゲームはもう始まってんだ。」

青年がそう言うと、他の全員が急に動き出した。
そしてみんな銃口を浩太に向けた。

「え？みんな…？」

浩太は動揺を隠せない。

「お前がねてる間にこっちで計画立ててたんだよ。お前を最優先に殺すってな。」
「なん…だと…？！」

浩太の体中から冷や汗が垂れる。
そしてみんなが親指でカチッとした。
そう、カチッと。

「撃て。」

青年がそう言うとみんなが一斉に撃ち出した。
その弾は確かに、撃ち抜いていた。
青年の心臓を。

「なッ…？！」

浩太は多少驚いた顔を見せた
そして

「…クックック…フハハ…ハハハハハ！！」
「何が面白い……！」

青年は死にかけている中必死に声を出している。
「怖ぇよなぁ…怖ぇよなぁ！裏切りはよぉ！！」

浩太の顔、それは悪魔だった。
「クハハハハ…ゲホッ、ウエホッ…グホッ…ハァ…ハァ…ハハハ！！！」

「…ハッ………むせてんじゃねぇよ…カスが……」

青年は永遠の眠りについた。

そして浩太がこういった。

「え？俺、春日？」

ピンクのジャケット。僕は忘れない。（後書き）

感想評価お願いします

行き止まりは何らかのフラグがたったときに出るよね

真っ暗な牢獄。
何も見えず、身動きすらとれず。
息をするだけの植物状態。
そんな集団の中に春菜はいた。
するとそこへ、拓哉がやってきた。

「こいつらだ、運べ」
「承知。」

拓哉は黒いタキシードを来たSPを指導した。
そしてSPはその牢獄にいる皆んなをトラックに詰め込んだ。
牢獄といえもロッカーサイズのもので檻になっており、手足は縛られている。
そのころ戦場では———

「…ハァ……ハァ……ちくしょ…」

浩太は必死に逃げていた。
後ろからクールなお姉さんがはしってきていた。
そして浩太は追い詰められた。
行き止まりだ。

「…くそっ!!」

引き返そうとしたが、手遅れだった。
そこには銃をこちらに向けてるお姉さんが立ちはだかっていた。

「…手を挙げな」

浩太は言われた通り素直に両手を挙げた。

「銃を捨てな、よこせ」

浩太は銃をお姉さんの方へ投げた。
そしてお姉さんはその銃を拾いたままの確認をした。

「あたしの名前は杉山(すぎやま)　千春(ちはる)。死ぬ前に覚えときな。」
「俺は、中村…中村浩太だ…」
「じゃあな、浩太くん。」

杉山は引き金に手を抑えた。
そして目を強く瞑り、引き金を引いた。
大きい銃声と共に銃弾が飛び出した。

「キィーン！」

その打たれた銃弾は真っ二つに。
真上から降ってきたのだ。
そしてその真っ二つにした刀はそのまま杉村を真っ二つに。

「おい、行くぞ…！」

浩太はこいつが誰なのかわかっていない。
謎の男はフードをかぶって顔を見せようとしない。

「あの、誰ですか…？」

浩太は尋ねる。
だがしかし、謎の男は答えようとしない。
そして、たどり着いたのは、廃墟のマンションだった。
5階建てだった。5階からの景色は殺風景。
何もない。荒野のようなものだった。

「浩太…」

謎の男は浩太のことを知っていた。

「ったく、誰なんだよ！いい加減フード降ろせよ！」

無理くりではあったが浩太は男のフードを下ろした。
するとそこには――――

「……お前…………！！」

行き止まりは何らかのフラグがたったときに出るよね（後書き）

感想評価お願いします

足は大事だから。

「……お前…………！！」

その謎の男は、浩太もよく知る人物だった。
浩太とは親友のような関係だった。
そう、そいつは…

「青木……！！」

以前一緒にモンハンをやり
帰宅部オールスターズの一員でもある青木がそこにいた。

「青木も…このゲームに？」
「あぁ、まぁな」

それまで浩太は青木の姿を見たことはなかった。
このゲームの中に自分の知り合いがいるとなんだか嬉しいのか嬉しくないのか
複雑な気持ちにされた。

「そうか、一緒に行動しようぜ」

浩太がさそった。

「悪い。お前とはともに行動できない。」
「…なぜ？」

「………じゃぁな。死ぬなよ」

そう言うと青木は5階から飛び降りた。
そしてそのままはしって何処かへ行ってしまった。

「一体…何があったのだ…？」

浩太はよく理解していない。
青木がなぜ、このゲームにいたのか。
そして、なぜ。5階から飛び降りたのに走れるのかが…。

「…っつ！5階から降りるとか無理しすぎたぜ…足が痺れまくってやがる」

我慢していたようです。
やせ我慢のようです。はい。
浩太はもしかしたら俺も行けるんじゃね？と思ってしまい5階から飛び降りた。

ズドンッ！　ボキッ。

「ぬおはぁー！？」

浩太の足が悲鳴を上げる。
嫌な音がしたのは気のせいだろうか。
浩太は地面に横たわってもがいている。

「おいたたたたたたた、いてててて、あちゃぴゃー！！」

今の浩太は端から見ると害児にしか見えなかった

するとそこに、一人のじいさんが現れた。

「こんな所で何をしておる」

じいさんは訪ねてきた。

すごくヨボヨボだ。

「邪魔なのじゃい、死になはれ」

じいさんは浩太に拳銃を向けた。

浩太は足が痛くて動けない。

しかも、銃は捨ててしまった。

はたまたピンチの浩太。

「……死ぬのは、俺じゃない。お前だよ、じいさん」

足は大事だから。（後書き）

感想評価お願いします

今のおもちゃってリアルだよね

じいさんに拳銃を向けられ、あし動かず武器を持たずの浩太はいわゆるピン子【ピンチ】ってやつに侵されていた。

「今、なんて言ったんじゃ？わしは耳が遠くてのぉ」

爺さんはとぼけたふりをした。ように見えたがこれはがちなボケである。

「死ぬのは、俺じゃない。お前が死ぬんだ、このクソジジイ」

「おっホッホ　威勢のいい男じゃけん」

強気なことを言ったのだが、なぜ自分がこのような発言をしたかわからない。

まったくもってそんなような作戦は出来てない。

だけど、なぜか…

青木が助けに来てくれる

って思ったんだ。

俺は心の何処かで青木を信じ続けていた

そして何処と無く青木に頼っていた。

「撃つぞい。死にゃ」

じいさんが引き金に手をかけた。

そして、力強く引き金を引いた。

大きな銃声が鳴り響く。
その弾は、浩太の胸に直撃した。

青木はこなかった。
来てくれると、信じていたのに。
青木は姿を現さなかった。
じいさんは満面の笑みを浮かべた。

だがしかし、浩太は多少の傷みしか感じなかった。
胸に手を当てても血は出ていない。
そしてじいさんが笑いながらこういった。

「これ、エアーガンじゃ　ぬっはっはっは」

浩太の怒りゲージが上昇。

「死ぬのは、俺じゃない　じゃとｗｗｗ　誰もしなないんじゃよｗ」

浩太の怒りゲージが上昇。

「なんかかっこつけっとったわいｗｗ　ださいのぉｗｗｗ」

浩太の怒りゲージＭＡＸ

「すげぇ、気取って言い張ってたわいｗｗ　なんかｋ（ｒｙ」
「黙れやぁぁぁぁぁあああ！！！」
痺れた足を無理矢理立たせて精一杯の力でぶん殴った。
殴ったのは快感だが、手が痛いお（　＾ω＾　）

「わしゃの骨が折れたじゃよ。痛いのじゃ。」
「とりあえず、お前はどっか行け！」
浩太はじいさんを追い払った。
じいさんはテコテコ走っていった。
「よし、戦場へ戻るか。」

今のおもちゃってリアルだよね（後書き）

感想評価お願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2301y/

人間はクズ　いや、俺は人間のクズ。

2011年12月15日23時45分発行